DEBUT 首長

石川県七尾市長　不嶋　豊和氏

ふしま・とよかず　1949年石川県七尾市生まれ。73年中央大学法学部卒後、石川県庁に入り、企画振興部次長、教育委員会事務局教育参事、企業局長を経て2009年、七尾市副市長。前市長の任期満了に伴う12年10月の市長選で新人３人の争いを制し初当選。63歳。

退職者呼び込みへ家賃補助 合宿需要開拓し観光客底上げ

七尾市　能登地方の中心都市で人口は約５万8000人。和倉温泉や能登島ばかりでなく、安土桃山時代の画家、長谷川等伯の生誕地であることも観光資源として売り込む。

――まちづくりの柱として移住促進を掲げた。

「ハッピーリタイアメント（幸せな引退生活）は七尾で」と全国に呼びかける。当市では毎日１人の割合で赤ちゃんが生まれる一方、お葬式は２件近い。人口減少は深刻だ。まず観光などで訪れたくなる街にしたうえで、交流人口の拡大から一歩踏み込んで定住に結びつける。都会の企業を定年退職した世代などを市中心部に呼び込み、年金とささやかな仕事で暮らせる仕組みを作りたい。

市内の空き家を借りて住む人に家賃を補助することを考えている。もともと七尾は食、自然、文化がそろった土地で、県外者を引きつける条件がそろっている。いきなり定住まで行かなくても、徐々に生活の拠点を移してもらうような方法もある。大手企業の元技術者が移住してきたら、地元企業の技術力の底上げに貢献してもらいたい。

――雇用を維持するために地域産業の再生が欠かせない。

金沢大学と包括協定を結び、地域に根ざした産業の振興プランを練っている。企業誘致では大物狙いはしない。むしろ規模は小さくても地元と連携して既存企業の高度化や新分野の展開につながるような進出例を積み上げることが大切だ。

――１次産業も環境は厳しい。

産品のブランド化と６次産業化がカギを握る。七尾港ではブリの水揚げが多いが、同じ富山湾で漁獲しても富山県の氷見に比べて首都圏などに浸透していなかった。産地の努力でようやく評価が高まってきた。

能登島では練り製品大手のスギヨに続き、建設業も農地を取得して農業経営に参入する例が出ている。市としては販路開拓の支援が重要になる。

――北陸新幹線の金沢開業が２年後に迫る。

観光客に金沢からどう足を伸ばしてもらうかだ。まず和倉温泉を能登観光の拠点と位置づけたうえで、物語性のある能登半島の周遊ルートを提案する。金沢と七尾を結ぶJR七尾線を観光目的でも利用しやすくなるよう、運行体制をJR西日本と協議していきたい。観光客の来訪目的は多様化している。市では高校・大学などのスポーツ合宿を誘致するため、国際サッカー連盟（FIFA）の公認基準を満たすサッカー練習場を整備してきた。宿泊者への補助もあり合宿需要は年間７万人まで増えた。

和倉温泉は最有力旅館の加賀屋を筆頭に高級施設が建ち並ぶが、中堅旅館でも経営が成り立つ仕組みが必要だ。合宿に加え、修学旅行や外国人客を掘り起こす。価格帯を広げることで若い世代に七尾の思い出を作ってもらい、将来再び泊まってくれるように長い視点で顧客を増やしていきたい。

（聞き手は
金沢支局長　**加藤　嘉明**）

禁複製・無断転載